

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名 白鳥 洋子

本研究は19世紀フランスの建築家ピエール＝フランソワ＝ラブルーストに関する建築史的研究である。ラブルーストについてはすでに世界的に注目を集める近代建築史上もっとも重要な建築家の一人であり、数多くの研究蓄積がある。本論はこうした膨大な研究蓄積の上に立って新たなラブルースト像を描こうとする挑戦的な研究であるといえる。とくにラブルーストとフランス・アカデミーとの間で交わされたパエストゥム論争について、一次史料の博搜によって従来の研究をはるかに深めた点は、本論の重要な学界への貢献であるし、ラブルーストの建築構造に対する独創的な想像力を「箱入れ構造」という観点から説き明かした点もきわめて重要である。

本論は従来の膨大な研究史を整理した「序」があり、そこでラブルースト研究の達成点と未開の領野が明確に示されている。著者はラブルーストの因習的な理解に対して、一石を投ずる立場から従来あまり深められてこなかった「パエストゥム論争」に大きな力点を置くことが宣言されている。

第一章パエストゥム論争の概要、第二章アンリ・ラブルーストのパエストゥム研究、第3章1828年の芸術アカデミーの報告の3つの章が本論の中核をなす部分であって、世を騒がせたこの論争の詳細な内容を可能なかぎり多角的な視点から論じており、この叙述の厚みが本論の意義をよく示している。

第一章ではパエストゥム論争に至る経緯が明らかにされる。ラブルーストがフランス・アカデミーの奨学生として留学し、留学中に実見した古典建築のなかのパエストゥムに関する研究レポートが従来のアカデミーの理解を根本的に覆す大胆な説の提示であったため、アカデミー側がラブルーストの研究に対してあらゆる手段をもって否定の裁定を断行しようとした事件である。著者はこの年譜的検討のなかで必要な文献についてみずから和訳を試みており（附録に添付）、論争の全体像の解明になみなみならぬ意欲をもっている。その結果、本論争のもっとも重要な論点が内陣が屋根に覆われたギリシャ神殿にあること、パエストゥムの石積構造の2点にあったことが明らかになった。

第二章ではラブルーストの古典建築研究全体に視点を広げ、彼のパエストゥム研究の背景にはネプチューン神殿、ケレス神殿、バシリカの3神殿の存在があったこと、これらの分析に対してきわめて科学的な態度を堅持しつつも「意匠と技術の同時性」という建築家ならではの分析視角があらわれていたことを指摘した。

第三章ではアカデミーの報告が取り上げられ、詳細な分析が行われている。ここでは先行研究がほとんど注目しなかった「1828 年の奨学生作品に関して建築部門からなされた報告」という一次史料を入手し、あらたな視点からこの報告を位置づけ直した。この結果、アカデミーが問題とした主題や批評の実際が明らかになったと同時に、本質的な部分でラブルーストの考え方はアカデミーの理解と矛盾するものでなく、古代ギリシャ神殿の理解をさらに深化させるものであった。

第四章は以上の論争のなかで見え隠れするラブルーストの建築家としての空間・構造理解が実際の作品にどのように反映されているかを検証した章で、具体的に二つの図書館の構造に関する分析が行われている。堅固な石造の壁面に繊細な鉄骨が挿入された「箱入れ構造」は、ラブルーストのもっとも独創的な提案であるが、この鉄骨構造部は完全な自立性が担保されており、水平力は石造部分と分離されて扱われている。またペンデティブ・クーポールは、従来室内意匠的な側面からのみ分析されてきたが、著者の理解では、鉄骨構造物全体の安定性のために大きな働きをしていたことが発見された。パリの図書館が自立構造だとすると、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館は「箱入れ傘構造」とも呼ぶべきもので、石造部分と一定の関係をもつかたちで設計されている。こうしたラブルーストの構造・空間・意匠をそれぞれ独立ではなく相互に関連するかたちの設計はまさにラブルーストの独創的な建築家の素質があらわれた部分であって、それは前三章で検討されたパエストゥムの彼の独自理解と一貫したものであるとの結論に達したのである。

第五章結論では本論で取り上げた諸論点を再度総合的に定位し、「古典主義の終焉と新しい建築の興隆」、「ラブルースト自体の建築の源流」、「18 世紀からのフランスの建築の主題の継承」、「近代建築の源流」、「構造意匠の系譜」という 5 つの明快なテーマによってラブルースト建築を評価することに成功した。

以上、本論は従来の膨大なラブルースト研究のなかで十分に検討されてこなかった、パエストゥム論争分析に大きな基盤を置きながら、そこから古典建築へのラブルーストの眼差しをうまく取り出し、最終的に 19 世紀という建築の変革期になしたラブルーストの建築の意義を見事に示したのである。

以上から本研究は西洋建築史のなかで、とくに近代建築史の幕開けともいえるべき瞬間をラブルーストという建築家から捉え直した点で研究史上大きな貢献を行ったと評価でき、博士（工学）にふさわしい業績である。本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。